

## 傳雲龍の日本研究の業績と特色

——『遊歴日本図経』を中心に

王 曉 秋  
訳・張 麟 聲、木田知生

中国の晩清時代（一八四〇年のアヘン戦争から一九一一年の辛亥革命まで）における日本研究の対象となる人名著と言えば、何よりも黄遵憲とその四十巻五十万字からなる大著『日本国志』が思い浮かぶであろう。筆者はかつて十八年前に『日本国志』を考察し、『黄遵憲の『日本国志』について』という論文（中国『近代史研究』一九八〇年第三号）を発表している。その後、ここ十何年来、中国学者の手による新しい体系的な研究も見られる。<sup>(1)</sup>しかし、晩清の史学上価値及び巻数が『日本国志』に次ぐ傳雲龍の三十巻からなる『遊歴日本図経』及び『遊歴日本図経余紀』については、事情が少し異なっていると言わなければならない。

武安隆・熊達雲の『中国人の日本研究史』では、『遊歴日本図経』は「中国人による日本研究の質的進歩」のシンボルであり、「明治二十年代の日本を知る上で大きな価値を有する」と述べている。し

かし、その分の叙述は数百字程度に過ぎない。<sup>(2)</sup>また、佐藤三郎はその著『近代日中交渉史の研究』の中で、二回ほど傳雲龍とその『遊歴日本図経』に触れ、驚嘆すべき努力を払って成し遂げた「詳細な日本百科事典」だと評価する。<sup>(3)</sup>佐々木揚の論文「洋務運動期における清朝の外国事情調査」では、一八八七年の傳雲龍を含めた「出国遊歴官」派遣の経緯を記述し、傳雲龍は其中で一番優れていると評する。<sup>(4)</sup>木村晟の「『遊歴日本図経』の日本語彙について」及び大友信一の「『遊歴日本図経』の「方言」所載の語彙」は言語学の角度から『遊歴日本図経』の「方言」部分を考察したものである。<sup>(5)</sup>また、最近の王宝平の「傳雲龍の日本研究の周辺」は、浙江省図書館の蔵書を利用して、傳雲龍の著述の状況を調べたもので、有益な資料と手掛かりを提供している。<sup>(6)</sup>その他、筆者は十五年前に傳雲龍の『遊歴日本図経余紀』を標点解説し、『早期日本遊記五種』（湖南人

民出版社、一九八三年）中に入れている。さらに、拙著『近代中日啓示録』（北京出版社、一九八七年）と『近代中日文化交流史』（中華書局、一九九二年）の中でも傳雲龍とその『遊歴日本図経』を簡単に紹介している。しかし、これらのものはいずれも本格的な研究とは言えない。そこで、本稿は傳雲龍の生い立ち・業績、及びその『遊歴日本図経』と『遊歴日本図経余紀』創作の背景、創作の経緯、内容と特色について体系的に考察し、また黄遵憲の『日本国志』との比較も行う。

#### 一 傳雲龍の生い立ちと生卒年代、及び遊歴派遣経過についての考証

『遊歴日本図経』の著者傳雲龍は非凡な経歴を積んだ著述の多い晩清時代の役人兼学者であるが、彼についての伝記はほとんどなく、その生卒年代についても明確な記述がない。『清史稿』『清史列伝』どころか、『清代碑伝文通檢』『清代三十三種伝記引得』にさえその名がなく、わずかその故郷の地方誌『德清県新志』に程森という人が書いた小文が見られるだけである。本稿は傳雲龍自身の著述と程森の小伝、及びその他の資料を参考に、傳雲龍の生い立ち、及びその出国前後の経歴を以下のように整理する。

傳雲龍、初名は雲豐、字は懋元で、号が醒夫、自らの居を簞喜廬・不易介斎・味腴山館などと名づける。浙江省德清県の人だが、

生年は程森の小伝にない。『申報』光緒十三年（二八八七年）九月十二日の「選考合格遊歴人員名簿」に、「傳雲龍、浙江監生、兵部候補郎中、年四十六歳<sup>(7)</sup>」というのによれば、一八四二年の生まれとすべきである。しかし、杭州図書館所蔵の『簞喜廬文二集』に傳雲龍の写真があり、その側に「光緒十四年（二八八八年）四十九歳の時にアメリカのサン・フランシスコを遊歴した際に撮影した<sup>(8)</sup>」と自ら書いてあるので、その生年は一八四〇年ということになる。どちらが正しいかはともかく、アヘン戦争の時期、中国が近代に入った時期に生まれたことは確かであろう。

傳雲龍は小さいときから、経史を耽読し、地理や金石も好きであり、青年時代に雲南・貴州・湖北・湖南・江蘇・山東・河北などの諸省を旅する経歴もあった。その後、北京で小吏を多年務め、出国遊歴するまでは兵部武選司、車駕司の郎中であつた。公務の間にも彼は勉学に励み、著述に励み、「経部の学問では小学をたしなみ、史部の学問では地理と兵制をたしなんだ」と自称しているほどである。前後して、『字学三種』三卷（同治十三年味腴山館氏刊本）、『続彙刻書目』十二卷（光緒二年刊本）を編集し、『説文古語考補正』二卷（光緒十一年紅餘籀室刊本）などを著した。そして、『光緒順天府志』の編纂に参加し、その中の食貨志・政経志・地理志・河渠志など四十五卷の編纂に加わった。ちなみに、『光緒順天府志』は李鴻章などが監修、周家楣などが総裁、張之洞・繆荃孫が総纂、傳雲

龍・鮑恩綬など十五人が分纂といった錚々たるメンバーによって、光緒五年から光緒十一年まで六年間かかって編集された大著で、全部で百三十巻からなり、光緒十二年に刊行されている。

もしも一八八七年の試験がなかったら、「郎署二十年、碌々として短長無し<sup>(9)</sup>」と自ら言っているように、傳雲龍はおそらく伝統的な学問に没頭する一人のごく普通の士大夫に終わっていたであろう。

しかし、試験が彼の人生を変え、彼に奇特な経歴を与えた。このことは光緒十年（一八八四年）御史謝祖源（直隸承德府豊寧県出身、光緒二年進士）の、「時局多艱、請広収奇傑之士遊歴西洋」と題する上奏文に始まる。上奏文は「今、翰詹部属の中、抱負非常の者がいないわけではない。出使大臣に国ごとに二名連れていってもらい、パスポートを持たせて、その遊歴に資する。一年後にその交代を許し、留まりたいものはそうさせておく。その中の才識優れる者は、出使大臣の推薦により、他日の使臣の選に備えることもできるし、洋務を熟知した人材を多く持つことも可能になる<sup>(10)</sup>」と述べている。

光緒十一年二月十一日（一八八五年三月二十七日）、総理衙門大臣奕劻等もこれについて議論し、やはり「今、外交事務が日に日に多くなり、大いに人材を蓄え、群策群力の効を収めるべきである」、「内外の事情を知るようにさせるには、遊歴ということから始めなければならぬ」などと共鳴する。謝祖源の提案に対しては、「隨時属員をして国内を遊歴させ、その実績を考究記録する」、「翰詹部属の

中で、製機・計算・測量・軍事に明るく、且つ苦勞をものとせず、抱負を有し、出国遊歴に耐えうる者があれば、翰林院六部でこれを選考推薦して、総理各国事務衙門での試験を受けさせ、パスしたものを各国に遊歴させ、出使大臣がその面倒を見る<sup>(11)</sup>」とした。

この提案は皇帝の許可を得、翰林院六部にも知らせたが、しかし、実際に執行に移したのは大分後のことになる。光緒十二年十二月十日（一八八七年一月三日）、光緒帝が各部速やかに人員を推薦せよという旨を下した。そして、光緒十三年四月二十六日（一八八七年五月十八日）、総理衙門で十四箇条からなる『出洋遊歴章程』を起草し、遊歴官僚派遣の具体的計画を制定した。すなわち、五品以下の官員を十名から十二名程度を選抜し、海外で一年半ないし二年間の遊歴考察をさせ、毎月の使用金額は一人銀二百兩とする。遊歴官員は同文館などの選抜による通訳官を連れていくことができる。この事業の総経費は年額銀四万兩ぐらゐとする。遊歴官員の選考は総理衙門が司る。遊歴官員の務めは、「各所の地形関所・防備事情・風俗・政治・海兵・砲台・製機工場・汽車船舶・水雷砲彈などを詳細に記述し、参考に資する」というものであった。帰国後は、総理衙門に遊歴報告書を提出し、優れたものは奨励を受ける<sup>(12)</sup>。この規定は皇帝の許可を得、皇帝自ら「依議<sup>(13)</sup>」と朱筆でしたためた。

そこで、一八八七年六月十二日と十三日（光緒十三年閏四月二十一日と二十二日）の間に、北京清政府の総理各国事務衙門で一つの

変わった試験が行われた。即ち中国近代史上初めての出国遊歴官員の選抜試験である。従来の科挙試験と違って今度は四書五経をテストしないし、八股詩文も試験の内容に入らない。ひたすら辺境防衛・歴史地理・外交事務関係のレポートを書くだけである。そして、問題作りも答案審査もすべて総理衙門大臣の曾紀澤が自ら担当する。第一日は吏・戸・礼部の推薦による官僚をテストする。その人数は、曾紀澤の日記によれば、「三十二人推薦され、試験に来たのは二十人」<sup>(14)</sup>であった。試験問題は『遊歴日本図経余紀』によれば、「海防边防論」と「通商口岸記」であった。そして翌日は兵・刑・工部推薦の官員の番になり、推薦された四十四人中、三十四人が試験を受け、テーマは「鉄道論」と「明代以降における西洋各国との交渉の概略について」<sup>(15)</sup>であった。傳雲龍は答案において古代以来の中西文化交流及びアヘン戦争後の中西交渉、諸条約調印の歴史の大要を述べた。試験の結果、併せて二十八人が合格し、その中で傳雲龍はナンバーワンであった。『申報』は彼の答案をそのまま第一版に載せ、「時勢に留意する者と共に鑑賞したい」<sup>(16)</sup>とした。また、清末の著名な学者李慈銘はその『越縕堂日記』の中で、「近日、通商衙門にて日を分けて六部から推挙された遊歴人員をテストし、二十八人が受かり、兵部傳懋元がナンバーワンと聞く」、「懋元は明代以降の中外交渉論を題とし、広く援引して論述を行い、化学・重学・汽学などにも触れたが、その内容は実は墨子に基づくものである

る」と記している。ちなみに、彼は社会気風の変化に感嘆し、「国家試験として、出洋遊歴の分野を設けるに至ったが、応募するものの中には才氣溢れる者があり、これまた近日の気風がそうさせたのである」<sup>(17)</sup>と述べている。

合格した二十八人はまず総理衙門の大臣が接見し、面接を通して、その「器識」を酌量し、それから皇帝に引見した。最後に皇帝が朱筆で兵部郎中傳雲龍・刑部主事顧厚焜・戸部主事繆祐孫・刑部主事李瀛瑞・兵部主事劉啓彤・礼部主事李秉瑞・工部主事陳熾唐・刑部主事孔昭乾・戸部主事洪勲・戸部員外郎徐宗培・兵部主事程紹祖・戸部主事金鵬など十二人を正式な遊歴使として欽定し、彼らをアジア・ヨーロッパ・南北アメリカへ遊歴に派遣した。その中で、傳雲龍と顧厚焜とは日本・アメリカ・カナダ・ペルー・キューバ・ブラジル等の遊歴を命じられた。その時点で、中国は既に日本や欧米主要諸国に長期駐在の使節を派遣しているが、にもかかわらず、一度にこれだけ多くの役人を各国に派遣して遊歴考察に当たらせるのは、やはり有史以来初めてのことである。

傳雲龍の一行は一八八七年十一月十二日（光緒十三年九月二十七日）に上海を出発し、一八八九年十月二十一日（光緒十五年九月二十七日）には上海に戻った。その間、ほぼまるまる二年間遊歴したことになる。その遊歴のコースは上海から日本へ、それから太平洋を渡って、アメリカに到着した。それからカナダへ、そして、海路



でキューバへ、またニカラグア、エクアドルを通過してペルーに着き、それからチリを経由してブラジル、最後にまたアメリカ・日本を経由して上海に戻ったが、全長十二万八千四百四十里の長い旅程であった。

傅雲龍はもともと歴史や地理が好きで、且つ大志を有しており、遊歴使として各国に視察に行けることは、彼にとっては言うまでもなく雄飛の好機であった。従って、一部の遊歴使のように異国の風土の大雑把な記録に留まるのではなくて、どこに行っても綿密な調査に徹した。ある国に着く毎に、彼はまずその国の地理・歴史・政治・経済・民俗などさまざまな資料を収集し、それから自ら実地に行つて確かめては、各種の地図・統計表を作り、それから文字による説明を配して、「図経」にする。当時、日本駐在の清政府の公使黎庶昌は彼のことを「遊歴とは、いわば役所仕事である。が、懋元はそれを役所仕事としないで、万世に著書を残す大事業と見なしている<sup>(19)</sup>」と称えている。

このように、傅雲龍は遊歴を役所仕事としないで、著述して、国民の世界認識を高める大事業と見なしていたので、遊歴使の中では、一番勤勉に働き、業績も一番優れていた。遊歴期間中及びその後、彼は『遊歴日本図経』三十卷（光緒十五年刊）、『遊歴美利加合衆国図経』三十二卷（おそらく光緒十七年刊）、『遊歴英属加納大図経』八卷（光緒二十八年刊）、『遊歴古巴図経』二卷（光緒十五年刊）、『遊

歴秘魯図経』四卷（光緒二十八年刊）、『遊歴巴西図経』十卷（光緒二十八年刊）など、全部で六種八十六卷を完成した。と同時に、彼は編年体の旅遊記『遊歴図経余紀』（おそらく光緒十七年刊、実学叢書子部所収）十五卷を書いた。中には『遊歴地球図』一卷、『遊歴天時地理合表』一卷、『遊歴日本図経余紀』三卷、『遊歴美利加合衆国図経余紀』四卷、『遊歴英属加納大図経余紀』一卷、『遊歴古巴図経余紀』一卷、『遊歴秘魯図経余紀』二卷、『遊歴巴西図経余紀』一卷、『遊歴図経余紀叙例』一卷が含まれる。そのほかに、彼はまた大量の詩文を書いた。浙江図書館所蔵の『不易介集詩稿』によれば、彼は『遊古巴詩董』一卷（光緒十五年刊）、『遊秘魯詩鑑』一卷（光緒十五年刊）、『遊巴西詩志』一卷（光緒十五年刊）、『遊日本詩変』四卷（おそらく光緒十七年刊）、『遊美利加詩権』一卷（刊行年代不明）、『遊加納大詩隅』一卷（刊行年代不明）を書いている。以上「図経」「図経余紀」及び詩文等を全部計算に入れれば、百十卷もの膨大な著作になる。また、傅雲龍は日本滞在中に中国の逸書を探し求め、『纂喜廬叢書』（光緒十五年、傅氏日本東京刊本）を著した。中には『論語』十卷、その付録一卷、『新修本草』残本十一卷、『文選』残本一卷、『帰去来辞』一卷等が含まれる。

傅雲龍の著述は皇帝及び高官達の称賛を得た。翁同龢は日記の中で「傅雲龍が日本遊歴より帰朝、その著述甚だ多し」「文筆がとて<sup>(20)</sup>もよい」と書いている。元イギリス駐在公使郭嵩燾も日記に「傅懋

元、即ち各国を遊歴するものなり。その詩文、才氣に溢れたり<sup>(21)</sup>と記している。一八九〇年七月二十六日（光緒十六年六月十日）、總理衙門の「遊歴人員が前後して帰朝、その奨励につきて」の上奏状において、「傳雲龍は遊歴日本等各国図経八十六巻を著し、著述が比較的に多く、且つ広く蒐集援引していて、一生懸命、辛抱強く努力した者である」とし、「知府ではなくして道員に任官させ、並びに二品の銜を授与する」、「北洋大臣の許に行かせ、その任用を聞く<sup>(22)</sup>」ことを要請した。また、言い伝えによれば、皇帝も自ら傳雲龍を宴席に呼び、進呈した各国図経が「大変詳しい<sup>(23)</sup>」と褒め称えたという。だが、惜しいことに、海外の事情を熟知している傳雲龍は、帰国後、外交関係でその力量を発揮することがなかった。彼は道員という身分で、直隸總督兼北洋大臣李鴻章のもとに行き、北洋機械局會辦、そして、間もなく總辦に昇進した。そして、一八九二年、李鴻章の推薦で、海軍衙門の總辦章京を兼ね、彼はこのポストに就いた最初の漢人となった<sup>(24)</sup>。その後、かれは神機營機器局の總辦をも兼ねていた。北洋機器局の長をつとめている間に、彼は西洋の科学技術を紹介する書籍をも著した。例えば、『繪図比例尺図説』『考空氣砲工記』『考化白金工記』（いずれも光緒二十一年石印本）等である。また、『実学文導』二卷（光緒二十一年刊）を著し、彼自身の地理・海防・天文・数学・化学等に関する論文三十九本と他の著者の同じ主旨の文章を十五本収録した。

一九〇〇年に義和団運動が勃発し、続いて八ヶ国連合軍が北京に入り、西太后と光緒皇帝とは慌てて都を後にした。その時、傳雲龍は「束装して行在に馳せ赴き」忠誠を尽くしたかったが、しかし、病気で志を果たせず、その子範初が天津經由で彼を南の地に連れていき、翌年に上海で病死した。その卒年について、『徳清県新志』巻七にある程森の「傳雲龍傳」では、「庚子（一九〇〇年）に、雲龍は束装して行在に馳らせ赴きたかったが、病気で上海でなくな<sup>(25)</sup>った」と大体のことしか書いていない。しかし、同『徳清県新志』巻八の「傳範初傳」では、傳範初がいかにもリスクを冒して北上し、父親を安全に上海に連れ戻したかを書き、また「次年に父卒す<sup>(26)</sup>」と書いてあるから、傳雲龍は一九〇一年になくなったとすべきであろう。

傳雲龍の父は傳羹梅で、浙江徳清県の郷紳であった。傳雲龍の妻李端臨は読み書きができ、且つ漢方医学に通じ、夫の著述の際には墨をすったり本を調べたりして助けた。息子が四人あり、範初は同文館の卒業、かつて父を助けて、出国遊歴の図経の校正等をし、自分も『算学進階』『電化理解』等の科学関係の書物を書いている。他の三人の息子範翔・範鉅・範冕も父の著述や遺稿の整理を手伝った。また長女の範淑は詩文に長じ、『小紅榴室吟草』二巻を書いている<sup>(27)</sup>。雲龍が以上述べたような多くの書物を著すことができたのは、その家族の協力があつたからこそであろう。

## 二 『遊歴日本図経』の創作及び刊行について

傳雲龍は遊歴使として前後して二回日本を訪れた。最初は一八八七年十一月十二日（日本明治二十年、光緒十三年九月二十七日）、日本郵船会社の東京丸で上海を出発し、二日後に長崎に着いた。そして、日本で半年ぐらい遊歴し、一八八八年五月二十九日（日本明治二十一年、光緒十四年四月十九日）、日本を離れてアメリカに赴いた。それから南北アメリカを遊歴してから、一八八九年五月二十七日（日本明治二十二年、光緒十五年四月二十八日）もう一度日本に到達する。そして、五ヶ月ほど遊歴し、同年十月十五日（陰暦九月二十一日）に横浜で西京丸に乗り、神戸・馬関・長崎を経由して、十月二十一日（陰暦九月二十七日）に上海に戻った。日本で併せて一年間ぐらい滞在したことになり、その時間は外国遊歴総時間のほぼ半分を占めている。

傳雲龍が日本遊歴中に書いた日記が『遊歴日本図経余紀』の三巻であり、前二巻は北京を出発して最初の訪日の終了までのもので、後ろの一巻は南北アメリカからの帰途、二回目日本を訪れたときのものである。この全三巻で、傳雲龍は日本遊歴及び『遊歴日本図経』の創作の全過程を詳しく綴っている。

『遊歴日本図経余紀』を読めば分かるように、遊歴中、傳雲龍は日本各地を駆け回り、各界の人士と付き合い、日本のさまざまな機

関・工場・学校を見学し、各種の宴会に出席し、名所旧蹟を訪ね、詩文の唱和を行い、日本の図書や中国の逸書を購入し、非常にハードなスケジュールをこなしていた。彼は当時の総理大臣伊藤博文・陸軍大臣大山巖・海軍大臣西郷従道・通信大臣榎本武揚・農商大臣黒田清隆・宮内大臣土方六元などの日本政界の要人達と会見し、三菱造船所・三菱炭鉱・千住製絨所・海軍造船所・砲兵工場・硫酸工場・紡績工場・鉄工所・酒製造業などを見学し、また、日本の大学・中学校・小学校・師範学校・軍事学校・聾啞学校・博物院・兵営・監獄・寺院などを訪ねた。このように、彼はいろいろなところに足を運び、自らの目でいろいろなものを確かめ、生のデータを手し、その『遊歴日本図経』の創作の基礎固めをした。

中日文化交流の面においては、傳雲龍は多くの文人学者と交際し、彼らと詩文の唱和を行い、彼らのために、題字、作詩或は序文を書いてきた。愛知県だけでも、日本の人士から「詩文を数百求められ夜が明けるまで筆をとり」、離れる直前にまた「車に倚りかかって数紙を補った」<sup>28</sup>。そして、中国の逸書を訪ねて駆け回り、逸して千年近くなる唐卷子本『新修本草』などの珍本を見つけ、序と跋を付して、東京で直ちに印刷させ、『纂喜廬叢書』に収録した。

日本滞在中、スケジュールがこれだけハードにもかかわらず、彼はやはり志を固くして、『遊歴日本図経』の編集を自分自身の主要な務めとした。その日記によれば、出国前に彼はすでに編集の要綱

を決めていた。他国のことをよりよく理解するために、彼は出国前にまず天津の北洋機器局・電報局・税関・砲台・開平炭鉱・天津から開平までの鉄道、さらに天津武備学堂・上海の税関・江南製造局・公和製糸局などを見学した。そして、日本についてからは、実際に視察すると同時に、日本の書籍と地図を大量に買い、図経の編集のために資料の準備をした。その日記には何回も「日本書と図を採す」、「新橋書肆に赴き、図書を訪ねる」、「書肆をまわり、海図を採す」、「書房をまわり、日本人の作った万国全図を見つけた」などについて書いている。場合によっては、大変高い本もあったが、彼はためらわずに買い求めた。

傳雲龍の日記で分かるように、彼は一八八八年三月六日（光緒十四年一月二十四日）に『遊歴日本図経』を正式に書き始めた。当日に「凡例」を書き、翌日に「経緯表」を完成し、三日目に「中国日本月朔表」を著した。一八八八年三月から四月までの間に、黎庶昌公使と皇居を見学するような重要な活動以外には、ほとんど毎日『遊歴日本図経』のために机に向かっていた。一日で表の一つぐらいを書けるときもあるが、「疆域表」「日本沿革表」「府県分疆表」などのような、複雑で推敲を要するもの場合は大体二、三日かかった。四月二十九日東京で大きな地震が起こったが、それにもかかわらず、彼は書き続けた。こうして、五月上旬までの二ヶ月ぐらいで、すでに二十六巻の草稿をほぼ完成した。アメリカへと出発する

ために、その時点では仕上げの時間がなかったが、黎庶昌公使はその草稿を読んだだけで、「大変良い」と褒め称え、序を書くことを応諾した。

一八八九年五月二十七日（光緒十五年四月二十八日）、傳雲龍は南北アメリカの訪問を終えて、再び日本の土を踏み、本格的にいろいろな図経の創作に取り掛かった。「昔は遊を主とし、この度は遊を紀することを主とす」として、船を下りて東京に着いたその翌日には、彼はすぐに『遊歴美利加合衆国図経余紀』の「大事編年表」を補って書き、それから、一月ぐらいの間に『遊歴美利加合衆国図経余紀』の初稿書きを終えると、直ちに『遊歴日本図経』の仕上げに着手した。八月上旬から、銅版による地図の印刷を行い、と同時に、欠けている表と図を補い、九月いっぱいで一応の完成を見、印刷の校正をはじめた。十月上旬には自ら築地などに行って、印刷を督促したりした。それから、日本の友人に別れを告げ、十月十五日（陰曆九月二十一日）に横浜で西京丸に乗り、帰国の途についた。

帰国後、傳雲龍はさらに李鴻章、俞樾などに序を仰ぎ、また、総理衙門に提出して皇帝の御覧にも備えた。黄遵憲の『日本国志』に比べて、傳雲龍の『遊歴日本図経』はその創作の時期も完成の時期も遅い。しかし、その印刷は大変早かった。一八八九年八月（光緒十五年）には東京で印刷所に依頼し、十月には全部完成して、本となった。表紙の裏に「光緒十五年夏六月日本にて」と書いてある所

のである。ちなみに、『遊歴日本図経』の一部は一八九一年刊行の『小方壺齋輿地叢鈔』の第十帙と再補編第十帙に収録された。第十帙の日本沿革・日本疆域險要は『遊歴日本図経』の卷二地理二、日本山表説は『遊歴日本図経』の卷五地理五、日本河渠志は『遊歴日本図経』卷七河渠志、再補編第十帙の日本風俗は『遊歴日本図経』の卷十風俗の部分である。<sup>(29)</sup> こうしてその影響がさらに広まった。黄遵憲の『日本国志』は創作の時間が長く(一八七九―一八八七年)、完成は比較的早かった(一八八七年)。しかし、広州富文齋に印刷を託した時期はかなり後の一八九〇年(光緒十六年)のことで、印刷のスピードも遅く、正式に出版したのはさらに遅れて一八九五年(光緒二十一年)のことである。

時間が切迫していて、異国にいる身でもあり、傳雲龍の『遊歴日本図経』の創作と刊行にはいずれも幾多も困難があった。その自序において、傳雲龍はその難事の一部に触れた。第一に言語文字方面での困難である。日本の「古書は漢文だが、後の地理・海志・兵法・商学・芸術となると、半分は平仮名・片仮名が混ざり、訳にくい」、「西洋の単語をそのまま音で綴り、おまけに日本語の句読は常に順序を転倒しており、その上、漢字一字に三種類も四種類も発音があり」、「また、日本語には常に俗語が入る」などの理由で、大変難しいのである。第二に、製図・版組・校正・印刷関係の難事。「図は銅版でないと綺麗に印刷できない、鉄道電線などは赤で示さ

ないと分かりにくい」、「活字は清書屋の代りになるが、何度もやり直さないと(校正しないと)、稿を定めることができない」、「校正の人が少なく、しかも時間が切迫している」、「印刷工が少なく、鉛版で補わないと、間に合わない」、そのために、常に「いらいらしている」。その上、各地を移動しながら、執筆するので、「移動の時間が閉じこもって執筆するそのの倍になり、汽船が停泊するやいなや筆を動かし、一頁も終わらないうちに、また汽船に乗らなければならない」。<sup>(30)</sup>

これほどの難事にもかかわらず、傳雲龍は依然として頑強な毅力で書き続け、「筆力が衰え体力がなくなる度に、期限が切迫していると自責し、四鼓に起きて机に向かった」。<sup>(31)</sup> その状況を見てそれは自ら作った枷であり、本の完成は「三十年はかかるだろう」と彼をあざ笑う人もいたが、彼は意に止めず、ひたすら頑張り続けた。それだけ短い時間で、全三十巻の創作・製図・製表・校正・印刷など大量の仕事を成し遂げたのだから、その疲弊はいうまでもなく大変なものであった。その間に「疑えばすぐに問い、訳せばすぐに書いた。そこでは、記録する者、図を描く者、活字を組む者、銅版画を彫る者、鉛を刻する者、石印をする者、いずれもが自らの技芸を集め、書物の完成を期したのである」。<sup>(32)</sup> そのために、彼はいつも深夜まで仕事をし、翌朝になってしまうことも度々あった。彼の日記に次のような記述が見られる。「夜四鼓になったが、筆を休めず」、



「その夜、鶏が鳴いても、草稿はまだ終わらず」、「脱稿して、鶏再び鳴く」。傳雲龍はとうとう自分の辛抱強い努力で日本訪問が終了するまでに、この三十巻の大著を完成し、また四十七枚の日本の最新地図を銅版で作り上げた。そのスピードの速さ、効率の高さ、何れも驚くべきものである。そのために、彼の仕事を励ましながらか、見守り続けた黎庶昌は「船や汽車で動き回り、宴席や会談に参加し、いつも紙筆を手放さず、夜も燈火のもとで書き続け、手にペンができ、眼が疲れて見えにくくなった。本当に勤勉だ」と記し、また「このような人をして天下のことに当たらせば、できないことはなからう」<sup>(33)</sup>と褒め讃えている。

### 三 『遊歴日本図経』の特色

傳雲龍の『遊歴日本図経』の一番目立つ特色は、その記載が事実に基づいていることである。一八八五年三月、総理衙門が謝祖源の上奏文を議論して得た結論には次のように述べている。「目下の情勢について言えば、われわれが必要なのは、敵の事情を知り、西洋の法律などを摂取し、その製造、測量の技術を学び、水陸の戦法を習得し、税務・茶・商・牧・鉱山などのことを了解することである。たとえすぐに徹底的に知ることができなくても、その大要を先ず知るべし」<sup>(34)</sup>。一八八七年五月、総理衙門が作った『出国遊歴章程』の中では、遊歴官員の務めをもっと明確に規定している。すなわち、

各所の地形関所・防備事情・風俗・政治・海兵・砲台・製機工場・汽車船舶・水雷砲弾などを詳細に記述し、参考に資すること。そのため、傳雲龍が遊歴に際し、『遊歴図経』と『遊歴図経余紀』を書いたのは、単純なる学術的研究ではなくて、強い使命感をもって中国政府のために日本・アメリカなどの国々の実状を提供し、その参考に資そうとするものであった。このことについて、彼は『遊歴図経余紀』の自序に次のように書いている。図経を書くのは「すべてを借用参考にして、その全部が国計に関わっているとは敢えて言わない。しかし、少しでも時間を無駄に使い、むなしく一日の跋涉を重ねているようならば、どうして志に適い？ また君主に対面することなどできようか？」そのために、彼は「昼間に交遊し夜間に記載し、先ず全体の大要を掲げ、次に図経を手がけ、また致遠の知幾を探り、これを余紀に著した。浮聞をまじえることを欲せず、さらに浅薄な語を飾ることもしない」<sup>(35)</sup>。彼は創作において一貫して事実を大事にする構えで臨み、「美辞麗句は用いず、事実を記載することを主とする。国計を考えるのでなければ民生に鑑み、軍政を見通すのでなければ學術を研鑽し、天度を観測するのでなければ地險を訪ね、山水の奇はこれに次ぎ、習俗の異はさらにこれに次ぎ、風景が新しいだけならば省略する」<sup>(36)</sup>ことを強調し、また「妄誕の説は、それをむやみと取り組むよりは、むしろ割愛する」、「稗史小説家の言辞もまた採用しない」<sup>(37)</sup>と述べている。



傳雲龍は中国の歴史地理関係の書籍における図表の取り扱い方を踏襲し、地図と図表を主とし、それに簡潔な文字による説明を配する。司馬遷の『史記』の表、班固の『漢書』の志、酈道元の『水経注』の注の優れた伝統と技法を受け継ぎながらも、完全にそれを踏襲することはしなかった。「この図経では、古い文体を踏襲せず、時文による<sup>(38)</sup>」と自分で言っているほどである。『遊歴日本図経』の中で、彼は正確で明瞭な地図と具体的な統計図表で中国人に日本の本当の姿を提供しようとした。黄遵憲の『日本国志』と比べて言えば、大方似ている部分もあれば、それぞれの特色を見いだすことができる部分もある。黄遵憲の『日本国志』は主に日本の明治維新以降の諸制度を紹介した。文字による叙述を主とし、注をも挟み、また、「外史氏曰」の形で意見発表をし、日本の新政の長短を議論し、変革に関する自分の考え方もうちだしている。つまり、記述と議論を混ぜた文体である。これに対して、傳雲龍の『遊歴日本図経』は事実の列挙と統計数字の図表の提供を主とし、評論をほとんど加えていない。彼は「文章は必ずしも自分のものではないものの、正しいかどうかが肝心である」、「事実<sup>(39)</sup>に依拠して直書し、是非を天下におおやけにするのである」と主張し、つまり、自分の務めは日本明治時代の実状を提供することで、各種の判断や決定は政府の要人達がすればよいと考えていた。

事実を大事にするために、傳雲龍は図と表を大いに生かした。彼

は言う、「国家の利害を理解するにも、地図を離れては不可能である。ましてや、中国と日本とは極めて密接な関係にある<sup>(40)</sup>」。外国の地理を知ろうとするには地図がなければならない。そこで、彼はベストを尽くして銅版で日本全体の地図を作った。日本の電線と鉄道線をはっきりと表示するために、彼はまた銅版と同時に、木版をも使い、赤の単線で電線を表し、赤の複線で鉄道線を表した。さらに多くの鉄道駅や港湾停泊地、及び暗礁なども詳しく表示し、その精細の程度は普通の日本地図をずっと越えている。またこの全国地図とは別に、四十六枚の府県庁の地図を作っている。実は黄遵憲は図表を大事にしなかったわけではない。『日本国志』の「凡例」に「思うに事物は図表に著さなければ明らかにしたり詳細に示したりはできない」と言っているから、その考え方は傳雲龍と一致している。『日本国志』を書いていた時、黄遵憲は地図を付けようとして、資金を出して日本陸軍参謀本部のものと地図課長木村信卿少佐に頼んでいた。しかし、木村氏が清国公使館に軍事秘密を売ったと告発され投獄されたので、地図作製は未完に終わり、『日本国志』の大きな弱点となってしまったのである。また、傳雲龍は『遊歴日本図経』に百五十枚表を付けた。ちなみに、『日本国志』には表が百二十三枚ある。

傳雲龍は日本の人名・地名・官名を取り扱う際にも、従来のように中国の文人が自国のことに基づいて他国の国名・官名を随意に改

変するといった悪習をあらためて、事実を尊重することをモットーとした。彼は言う。「国名や地名、それに官爵などは、古い名称を用いることをせず、事実を記すことにする」、また、外国の官名については、「同文に依拠してそのまま記したり、音訳して意味を解釈する」、「無理に中国の官名に準拠して命名することはしない」。そして外国の地名に対しては「音訳するだけで意味を解釈しない」とした。これは黄遵憲が『日本国志』を書いていたときの次の主張に似ている。「歴史家の記述では努めて事実に基づいて記録し、過去の人物や他国の君主の名号を改易することは理屈にかなったことではない」<sup>(42)</sup>。

傳雲龍が『遊歴日本図経』を書いていた際には、実地視察して、生のデータを手入することを重視した。海軍の図表を作るために、彼は自ら「重要な関所については実測し、実際に自ら検分しており、単なる憶説ではない」鉄道の表を作るために、彼は十何キロの道を往復して、自ら二回鉄道会社を訪問した。兵庫県の砲台を視察したときには、彼は目の前で人を使って砲台の内外の長さや面積を測らせた。日本の食料価格を調査したときに、彼は一々詳細に日本各地の米・小麦・糯米・大豆・小豆の具体的な価格を調べた。それだけではなく、彼はその蒐集した最新の資料で前の年のそれと比較して分析した。統計数字の多くは彼が『遊歴日本図経』で編んだ年の最新資料であり、明治二十年代初めごろの日本の実状を反映してい

た。これに対して、黄遵憲の『日本国志』は、わりあい早い時期に編集されたので、収録されている資料は彼が日本を離れる時の明治十四年（一八八一年）までのもので、その後の日本の多くのできごと、例えば、日本銀行の成立や、地税条例の制定、それに政党・内閣・憲法の発布などについてはもちろん言及されていない。しかし、これらのことは『遊歴日本図経』に全部書かれている。それだけではなく、印刷後に、新しい事情が起これば、傳雲龍はそれを素早く付け加えた。例えば、愛媛県の一部が香川県として新設されたことを知るやいなや、これを補って記し、また直ちに香川県の地図を書き、「その当日に刻して印刷させた」。このことから、その厳格な科学的な精神が知られるであろう。

傳雲龍は『遊歴日本図経』を著すと同時に、『遊歴日本図経余紀』を書いたが、これは互いに相補いあうものである。『遊歴日本図経』は紀事体で、『遊歴日本図経余紀』は編年体である。「図経は地域を主とし、余紀は日時を主としている」。

「図経では遊歴した国家を範囲としたが、余紀では一日の見聞に基づいており、一地方の区分にはとらわれていない」<sup>(43)</sup>。これはなかなかおもしろい書き方であり、従って、われわれも両書をあわせて読むべきである。ことに『遊歴日本図経余紀』のほうは、傳雲龍の遊歴の全コース、おまけに日本の友人との往来、及び『遊歴日本図経』成立の経緯を書き留めており、また、氏の意見や感想をもある

程度書いているので、『遊歴日本図経』の不足を補うことができるだけでなくて、『遊歴日本図経』を研究するための重要な根拠にもなる。

#### 四 『遊歴日本図経』の内容

傳雲龍の『遊歴日本図経』は全部で三十巻であり、内容は十五の大類、百八十三の細目からなっており、約四十万字である。十五の大類はそれぞれ天文・地理・河渠・国紀・風俗・食貨・考工・兵制・職官・外交・政事・文学・芸文・金石・文徴で、黄遵憲の『日本国志』の十二の志（国統・隣交・天文・地理・職官・食貨・兵刑法・學術・礼俗・物産・工藝）と大体似ているが、重んじるところがそれぞれ違う。例えば、『遊歴日本図経』では、地理と河渠で七巻になるが、『日本国志』では地理志の二巻しかない。『遊歴日本図経』の文学・芸文・金石・文徴四類全部で十一巻あるが、『日本国志』では學術志の二巻しかない。逆に『日本国志』では、隣交志五巻・兵志六巻・刑法志五巻になるが、『遊歴日本図経』では外交と兵制とはそれぞれ一巻、刑法は政事の中の一部でしかないのである。

以下、『遊歴日本図経』と『遊歴日本図経余紀』の中に現れている日本に対する総体的認識と明治維新観、及び日本の地理・歴史・政治・外交・中日関係・経済・軍事・教育・風俗・文化芸術・言

語・文字など十いくつかの面の内容について、簡単な紹介と分析をする。

まず日本に対する総体的認識と明治維新観を取り上げる。傳雲龍がアジアと南北アメリカの六国を視察してから、形成したイメージは「アメリカは傑出した富強国家であり、また、日本を中外の枢要国と認めないわけにはゆかない」<sup>(44)</sup>ものであった。すなわち、アメリカは世界で一番豊かな国であり、日本は東西交通の枢要の地にあり、中国にとっては、二つとも知っておかなければならない国であるとする。彼はまた次のように述べている。「地域が隔絶しているとすれば、相反していることを鑑みる要があるが、日本については近似している点から觀察すべきである」<sup>(45)</sup>。つまりところ、地球の反対側のアメリカは中国とは文化・伝統・制度・風俗などが異なるために、比較参考にしなければならぬし、東隣の日本は中国の文化伝統と似ているから、これを知って鑑みなければならない。日本の明治維新については、傳雲龍は次のように考えている。「唐に学んでから現在に至るまで、日本はすでに千二百年ほどの間、ことごとく中国を範としてきた。ところが同治七年（一八六八年）の明治維新からは、懸念に西洋に習って変ずべきことを変じたばかりか、変じるようなないことまで変じた」<sup>(46)</sup>。「今西洋に習って維新をすすめるのはよいが、旧事をそしめるようなことはすべきでない」<sup>(47)</sup>。傳雲龍は日本の西洋の科学技術を学ぶことを肯定し、その曆法風俗の変化や漢学を

捨てることを批判し、基本的に洋務派の「中体西用」の明治維新観と変わりがなく、黄遵憲のような維新派の明治維新観とはある程度の隔たりがあった。もちろん同じく遊歴した顧厚焜の考え方よりはいくらか進歩的である。刑部主事顧厚焜も日本へ遊歴した際に、二巻の『日本新政考』を著している。そこでも日本明治維新以降の造船や造船などの新政のことを紹介したが、しかし、結論的には日本のことを大いに軽蔑していた。「日本人は奇異なるものを好み、そこで、変じるとなれば、すべてを変じているが、これはいかなる道理であろうか」「法度や典章を一旦弁髪のように棄てさってしまつたならば、そのことがこの国の幸福と言えるであろうか」<sup>(48)</sup>。このように、明らかに日本の政治法律制度の変革に反対したのである。が、傳雲龍は日本の君主立憲という重大な政治改革を批判するどころか、これを大いに紹介した。日本政事の年表の冒頭に一八八九年（明治二十二年）二月十一日、明治天皇が憲法を發布するときの勅語と日本帝国憲法の全文を載せ、そして次のように述べている。「憲法の大要は、まず君権を立て、次に大臣の権、さらに次に民人の権とし、この三者を以て君民共治の例とした」<sup>(49)</sup>。

日本の地理に関する部分は『遊歴日本図経』中の一番優れた部分である。前述のように、傳雲龍はベストを尽くして四十七枚の銅版日本地図を作り、全国地図には赤の単線と複線とでそれぞれ電線と鉄道線とを表記し、沿海の暗礁なども記した。その正確さは他の中

国人研究者が作った地図より優れていることは言うまでもなく、一部の日本人の作ったそれよりもずっとよいのである。疆域目において、彼は日本の地理状況を生き生きと描き出した。例えば、武蔵は木の葉、安房はあひるの嘴、伊豆は巨大なやじり、甲斐は瓜、薩摩は蝦、陸中は牛の頸、越後はコウモリ、そして、日本全体は龍のようである。「本州島を身体とすれば、あごに当たるのが南の四国、頭に当たるのが西の九州、北海道が腰で、千島が尾である」<sup>(50)</sup>。彼はまた府県分疆表・四至八到表・沿革表などを作り、日本各府県の地域・面積・位置・沿革などを詳しく説明した。日本という島国の特徴をよりよく記述するために、彼は海道險要表・港湾測深表を作り、海岸燈塔・信号標識をも的確に表に取り入れた。また、日本の首都・都市・港口・道路及び島々・山脈・火山などについても、表を作つて紹介した。また、地理関係の二巻の河渠志も傳雲龍の独創である。当時、日本にまだ河渠関係の書籍がなかった。しかし、彼は『順天府志』の河渠志を編集したことがあり、そこで、それに基づいて、「水道を綱領とし、分合を条目とし」表でもって日本の大小千本以上の河の名称・分合・流域などを筋道正しく表記した。また東京神奈川引用水道表、及び鉱泉・湖沼・瀑布・橋梁などの表も作った。そして、地理に関係する天文学関係でも、重点的に経緯表・中日月朔表・晴雨寒暑表・沿海氣候表・沿海偏盛風表・潮流表などを作った。これらの表は中国と日本の航海や交通にも役立つものである。

日本の歴史と政治に関しては、『遊歴日本図經』では巻九の日本国紀の中で、まず天皇世系表を付け、神武天皇から明治天皇までの諸天皇の名前・年号・在位年数を記し、また中国の年号との対照も行った。それからは大臣の執政年表、すなわち幕府將軍の執政年表で、鎌倉幕府の源頼朝から徳川幕府の末代將軍徳川慶喜までの六百七十六年間のことを記述した。第三は藩国表で、各大名と藩主の名前・領地・官位・兵卒、及び廃藩置県以降の府県名を記述した。この三つの表は日本の歴史を知る上で大変有意義なものである。それから、傳雲龍は巻十九の日本政事の巻において、日本歴史大事年表を作り、中国と対照する形で、神武天皇元年から明治二十二年（一八八九年）二月十一日の憲法の発布まで綴り、日本国憲法の全文をも付した。また、巻十七の日本職官の部分において、明治前後の官制及びその変化沿革など、明治二十一年に増設した枢密院のことまで記した。今一つ目立つことは、巻十の日本風俗において、党目という部分があり、日本の政党問題に触れたことである。傳雲龍は日本の政治グループを六党に分けている。すなわち、維新反対の守旧党、西洋化と革新を主張する改進黨、漸進的政治を主張する漸進黨、調和を主張する大同団結党、政令に服従する順政党、及び自由を主張する自由党である。このような分け方はもちろん余り妥当ではない。当時の日本では、政党として自由党・立憲改進黨・立憲帝政党などがあり、それぞれの政治主張もそんなに簡単なものではなかつ

た。しかし、党派の争いについては、彼はそれなりの見方をしていた。すなわち、「双方に是々非々の主張があり、たがいに論争しあつて解決し難い」「それぞれに門戸の見を持し、おのれと異なる相手を伐つ風氣のなんと盛んなることか」<sup>(2)</sup>。

巻十八の日本外交の部において、傳雲龍は中日關係に重きを置いて筆を運んだ。中日兩國はその往來の歴史が長く、使節が絶えることがほとんどなかった。元代までは平和的な付き合いに限られ、「正史には使節の記載が絶えずみられ、中国への非難などは見受けられなかった」。その後の元軍が日本を征伐し、倭寇が明を襲うといったことなどは歴史的教訓として記憶しておくべきである。すなわち、「前事」を忘れないことは、「後事の鑑みである」とした。中日兩國が友好協力して、西洋列強に立ち向かうことを傳雲龍は主張し、「一言で言えば近交だ」と彼は言っている。彼はまた中日交渉大事年表を作り、中国の史書にある中日關係の文献や中日友好往來關係の詩文を付した。さらに、彼は日本が西洋各国と条約を結び、通商を行う過程を記録し、中国使臣表・別国使日本表・日本使別国表・中国流寓表・別国人在日本表・日本人在別国表・互受勲章表などを作った。これらの表の中には価値の大きいものが多く、例えば中国使臣表には何如璋、黎庶昌（二期）、徐承祖公使など四期間の駐日使節団の全員の名簿が含まれている。また、中国流寓表には徐福以来、中国から日本に渡った歴代の多くの人達の資料がある。



日本の経済に関しては、食貨の四巻と考工の一巻があり、経済のいろいろな方面、例えば戸籍・土地・物産・貨幣・貿易・関税・銀行・財政・国債・保険・工業・農業・漁業・商業・鉱業・交通運輸業などに触れている。記述は細かく、例えば貨幣については、傳雲龍は自ら何回も大阪造幣局を視察し、日本の貨幣の質・重量・形状・鑄文・図案・発行年代・造幣機械の名前・馬力・数量などをも詳しく記述している。それから、日本の輸出輸入などの国際貿易をも重要視し、表を用いて輸出輸入の貨物の数量・価値・毎年の増減数、及び主な輸出輸入の相手国と物品とを示した。また、日本の商社・銀行の数量と資本金額を統計し、「西洋の法制では、国が特別の証書を発給している。法は至善であり、日本はこれに習った<sup>(52)</sup>」と述べ、また商標表と特許表も付している。傳雲龍は日本の鉱業・鉄道運輸業をも重視し、官営と民営とを別々に記録した。特に、日本政府が民営鉄道を保護することを高く評価し、鉄道のメリットには利潤を得ることと、農業・工業・商業を便利にすることの二つがあることを指摘して、さらに次のように指摘している。「本線が長ければ利潤も得易く、公司是合するべきであり分割すべきではない<sup>(53)</sup>」。

日本の軍事については兵制の一巻しかないが、しかし、調査はやはり綿密なものであり、表を十八種類作った。まず日本兵制の沿革、とくに明治以降の新しい兵制と募兵制度を紹介し、それから、募兵の種類・地区・人数・職業及び身長・入隊遅延者の原因などを統計

的に説明した。また、日本の陸軍・海軍の編制・駐屯・武器などを調査し、いずれも、「遊歴によって実を得た」とする。また、日本の陸軍や海軍の人数が絶えず増加していることを統計を通じて理解した。しかし、日本に「一等の兵船がない」とするなど、まだ日本の軍勢力を十分に判断することができなかった。従って、日本が明治二十年代において驚異的な速さで大幅に軍勢力を拡張し、遂に明治二十七年（一八九四年）に日清戦争を起こすとは思ひもよらなかった。

日本の教育についても、傳雲龍は重点的に考察し、十五の表を作った。日本の学校を大学・中学校・小学校・師範学校・専門学校・女学校・雑学校など九類に分け、全体としての総表と種類ごとの分表をそれぞれ作った。また、幼稚園・図書館・出国留学者・授業料などについても表を用いて記録した。日本の学校総数は明治六年に一万二千五百九十七校しかなかったが、明治十九年には三万三千八十八校に発展し、学生数は三百六万人になっている。このことから、日本の明治政府がいかに教育を重要視していたかが分かる。また、「中国の義学のようにであり、府県の公立もあれば、町村の共同出資もあり、また、家塾として設置されたものもある<sup>(54)</sup>」と述べ、日本のいわゆる雑学を紹介した。雑学は日本の多角的教育の一環であり、その教育内容や科目などは、漢学と西学の両方を混ぜていた。また、日本の風俗については、特色のある記述の仕方をしている。



まず、「本州東海道の人は、ものわかりがよく賢く、とりわけ甲斐の人々は頑強だが陰険であり、東京府の人々は義侠心があるが浮薄である」「畿内の人々は心づりが細やかで、とくに京都人は文雅でおおらかであり、大阪人は道理をわきまえているが俗っぽい<sup>(55)</sup>」と言っている、日本各地の地域性格を述べ、それから、日本人の体型・姓名・服飾・飲食・居住・礼俗・歌舞・祭日などを記述した。

日本の文化と芸術についての紹介も『遊歴日本図経』の中で大きな比重を占め、文学一卷、芸文志二巻、金石志五巻、文徴二巻になる。学派の源流について触れたとき、傳雲龍は西洋学を習うやいなや直ちに儒学を罵倒した日本の学界における一部の人々を批判し、西洋の天文学・数学・化学・気学・光学・力学・電気学・動物・植物学などは何れも中国古代諸子の「格致」学に起源するものと主張した。むろん、このような「西学中源説」は当時の中国の学界で流行していた考え方で、黄遵憲も『日本国志』の中で、西洋の学問は中国の墨子に起源するものと述べていた。また、傳雲龍は日本の儒学・詩学・書道・医学・兵学・神道・仏教なども全部中国起源のものと論証し、「堯・舜・禹・湯・文・武王や周公・孔子の道」は「菽粟であり、布帛であり、片時も離れることができず、どうして窮まることか<sup>(56)</sup>」と強調していた。

芸文志の二巻では、日本のことに触れた中国人の著述の目録、中国逸書の目録、日本人の書いた經史子集類の目録を収録した。これ

について、傳雲龍は次のように述べている。「私が言う同文の国とは、ただこの国を言うのである。道を東魯（儒教）より分かち、文は西洋の書を翻訳し、短所を捨てて長所を取れば、これも必ずしも悪くはないかもしれない。聖王の道の貫徹ぶりを見、万方の略を通じてせよとすれば、或はまた、ここに取らん<sup>(57)</sup>」。日本のことに触れた晩清の中国人の著述のなかで傳雲龍は彼の出国前に出ていた何如璋の『使東述略』、黄遵憲の『日本雜事詩』、黎庶昌の『使東奏議』、『使東文牘』（何れも写本）、姚文棟の『日本地理兵要』、王韜の『扶桑遊記』、陳家麟の『東槎聞見錄』、俞樾の『東瀛詩選』、『東瀛詩紀』などをあげた。黄遵憲の『日本国志』はすでに書き終えられてはいたものの、まだ印刷されてはおらず、挙げられることはなかった。

傳雲龍自身が金石学者であり、その上に、金石文物の考証は史書の不足を補うことができると考えていたために、『遊歴日本図経』の六分の一の五巻分を金石志として書いた。そこでは、日本の碑刻・鐘銘・壺銘・鏡識・印章・刀剣など大量の金石文物を、図録や拓本を付して紹介し、また彼自身による評論や考証の結論などを加えているので、今でも高い学術的価値と芸術的価値を有している。ちなみに、図録のあるのは日本の神器三種・天璽瑞宝十種・法隆寺釈迦仏造像記・鑑真和尚墓誌・漢委奴国王印・親魏倭王印・弘法大師印・遣唐使印・天皇御璽・太政官印などである。また、金石年表

を作り、金石八百九十余种を収録し、これに加えて、各種の印文や、刀剣の鑑識文四千八百余种を付し、「その材質には金・銀・銅・石・瓦・磁があり、その文には篆・隸・飛白・行・正・梵・日本文がある<sup>(58)</sup>」とした。傳雲龍は公務繁忙の中でも、これだけ金石の蒐集と考証を行うことができたのは誠に驚嘆すべきことである。

日本文徴の二巻に傳雲龍が選んで入れた文章には、日本のことに触れた中国人の文章もあり、日本人自身の書いた文章もあり、さらに他の国々の人たちが日本のことについて書いた文章もあった。これらの文章は何れも時勢に関するものであり、検討して参考にすれば役に立つと彼は思っていた。これらの文章は、そのすべてが彼の考え方を代表するものではないが、文章の選択に彼の思想の傾向性を窺うことは十分にできるものである。日本のことを論じた中国人の文章は、「朱子璩与孫男毓仁書」、「梅曾亮記日本国事」、「日本教育会における黎庶昌の講演」、及び黎庶昌の「遊日光山記」、「刻古逸叢書序」など十一本を収録した。例えば、日本教育会における黎庶昌の講演は、明治維新以降の文化教育を重要視することを讃えて、「その学力の専精なること、また人材の奮起ぶり、実に全世界でも稀であり、盛んで輝かしい国運の充足した姿がそこにある<sup>(59)</sup>」と述べている。日本人の文章では「僧空海献書表」など日本古代と近代の文章百余りを選んだ。中には漢学者のものもあれば、維新志士吉田松陰、明治時代の政治家木戸孝允や大久保利通などの文章もあった。

大久保利通は『英国議院章程序』において、「天下の道を公とするには、議院が最善の方法である」と述べている。また、漢学者長尾慎太郎の『儒学本論序論』を収録し、西学が流行しているときも、「いわゆる文明なるものは、どうして西洋だけにあるのか」と言っていて、続けて儒学を研究する重要性を解いた。一部の研究者は文徴所収の藤野正啓の『与人論漢洋二学得失書』の中の一部を挙げて、これは「傳雲龍が日本の漢学者の口を借りて、漢学に対する日本の批判を叱責するもの」とし、このことで傳雲龍が「漢学の正統性」を守ろうとしている証拠だとするが、<sup>(60)</sup>今まで述べてきたように、文徴の文章がイコール彼の考えということにはならない。実は西学を唱導し、漢学を批判する文章をも彼は文徴にいていた。例えば、文徴に入っている蒲生重章の『岩崎弥太郎伝』は、冒頭から「儒生俗吏は時務を知らず、時務を知る者は俊傑に在りとは、弥太郎（三菱会社の創設者）のことを言うのであろうか」と儒学を批判しているし、中島雄の『擬米利堅人上書』も清政府に対して、「他国の長所を取り、日新の学を興して、その俗を変ぜん」と提案している。前述の藤野正啓の『与人論漢洋二学得失書』も「ある人物の席上、足下が洋学生を排斥し漢学を主張されるのを見聞したが、若し彼らに路線変更を強いようというのであれば、足下の見解もまた誤っているとしなければならない」と述べ、また一部の漢学者の弊病について、「理学を講じる者は空疎な事柄に取り付かれて病み、考拠の学

に携わる者は迂腐に病み、辞章を修める者も遊戲に近い。これでは人々に嘲笑されるのも当然であり、ともに無用の事柄である」と述べている。この藤野も実は漢字と西学は「車の両輪にたとえれば、どちらかだけを廃するわけにはいかない<sup>(61)</sup>」と主張しているのである。

最後になるが、日本の言語と文字についての紹介も『遊歴日本図経』の一大特色と言える。巻二十の日本文学の部分には日本文表があり、日本の言語文字の沿革変化を述べ、仮名文字五十音図、五声十五韻新譜と日本異体字表を付している。特に注意すべきなのは巻十の日本風俗の方言という項目であり、楊雄の『方言』及び『説文解字』の文体に倣って、中日語彙読音対照表を作っている。表には日本の古語もあれば、現代語もあり、それぞれ「謂之」と「語若」という形で表している。例えば、次のようなものである。「雨は、これを阿女と謂い、語は阿梅のごとし。島は、これを之万と謂い、語は喜馬のごとし。石は、これを以之と謂い、語は以西のごとし。海は、これを字美と謂い、語は伍米のごとし<sup>(62)</sup>」。このような形で四百二十組の中日語彙読音の対照を行っている。日本の学者木村晟、大友信一などの研究によれば、その中の三百四十三例は、日本の『箋注和名類聚抄』を参考にしている<sup>(63)</sup>。明代の中国人による日本研究書である薛俊の『日本考略』に、中日語彙読音が三百五十ぐらい収録され、「史上最初の中日辞典」と呼ばれている。李言恭と郝傑の『日本考』には日本語の単語が千百八十六収録され、鄭舜功の

『日本一鑑』になると、三千四百一個が収録されるに至る。清の半ば頃の翁広平の『吾妻鏡補』にも日本語の単語が千余り載っている。しかし、清末の日本研究者の著作、例えば黄遵憲の『日本国志』、何如璋の『使東述略』、王之春の『談瀛録』、陳家麟の『東槎聞見録』などにはこの種の内容がない。この意味で、傳雲龍の『遊歴日本図経』はそれまでの言語にこと寄せて日本を研究する伝統を受け継ぎ、これを発展させただけではなく、古代日本語と現代日本語との対照といった内容をも加え、日本の言語発展史を研究する上でも有意義なものとなっている。そのため、日本の研究者から重視されているのである。

#### 終わりに

以上の傳雲龍とその『遊歴日本図経』『遊歴日本図経余紀』の研究と分析から分かるように、従来の史書に取り上げられていなかった傳雲龍は、実は晩清の重要な人物の一人である。彼は中国史上初めての出国選拔試験の首席(状元)であり、近代以来初めて日本・アメリカ・カナダ・ブラジル・ペルー・キューバを遊歴したひとりであり、百何十巻の外国研究書の著者でもある。中国人の世界認識と中外文化交流の促進、及び逸書・金石文物の蒐集など多くの面で大きく寄与している。

ことに、その三十巻からなる『遊歴日本図経』と三巻からなる

『遊歴日本図経余紀』は、内容が豊富、統計が精密であり、筋道が通り、図表が明晰に描かれ、まさに日本の地理・歴史・文化及び明治二十年代の初め頃の日本の政治・経済・社会事情を反映した百科全書であり、その学術的価値は言うまでもなく、日本の風俗や、人情を浅く紹介しただけの著作や旅行記より、ずっと高いものである。このことを当時の駐日公使黎庶昌の次の言葉を借りて表しておこう。『本書が東倭の事跡のすべてを余すところなく取り込んでいるとはわたしは敢えて言わないが、その巨細精粗は条理正しく明らかにされており、著述の才幹を極めたものである<sup>(64)</sup>』。

ともかく、傳雲龍の『遊歴日本図経』は、晩清の中国人による日本研究の一つの力作で、中国人の日本研究史上で重要な位置を占めている。その史学的価値と思想性は、總体的に見た場合、黄遵憲の『日本国志』の比ではないにしても、そこに収載されている資料は『日本国志』のそれより新しいし、一方、その刊行年代は『日本国志』よりも早かったのである。また、日本の地理・金石・言語文字を紹介した部分など、『日本国志』よりも優れている部分もないのではない。従って、『遊歴日本図経』は中国人の日本研究の名著であるとしても過言ではなく、綿密に研究する価値が十分にあるものである。また、傳雲龍が『遊歴日本図経』を執筆した際の苦勞をものとしめない精神と、事実を尊重する謹厳な態度も、われわれは継承し、発展させなければならぬであろう。

## 注

- (1) 例えば、鄭海麟『黄遵憲与近代中国』（三聯書店、一九八八年）、盛邦和『黄遵憲史学思想研究』（江蘇古籍出版社、一九八七年）及びその他の著作と論文。
- (2) 武安隆・熊達雲『中国人の日本研究史』（六興出版、一九八九年）一三九頁
- (3) 佐藤三郎『近代日中交渉史の研究』（吉川弘文館、一九八四年）一五三頁、一九一—二一頁
- (4) 佐々木揚『洋務運動期における清朝の外国事情調査——一八八七年遊歴官派遣』『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学の研究』（福岡中国書店、一九九二年）
- (5) 木村晟『遊歴日本図経』の日本語集について、『駒沢大学文学部研究紀要』三一号、一九七三年。大友信一『遊歴日本図経』の「方言」所載の語彙、『国語学』一〇八号、一九七七年
- (6) 王宝平『傳雲龍の日本研究の周辺』『浙江と日本』（関西大学出版会、一九九七年）
- (7) 「考取遊歴人員名單」「申報」光緒十三年九月十二日
- (8) 王宝平『傳雲龍の日本研究の周辺』による。
- (9) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷三十、自序
- (10)・(11) 奕助他「議覆謝祖源奏請練習洋務人才疏」。葛士濬編『皇朝經世文統編』卷百二十。謝祖源の奏の内容は、この「議覆謝祖源奏請練習洋務人才疏」の冒頭の「伏查該御使原奏内称」による。

『皇朝經世文三編』所収の謝祖源の「請派員遊歷外洋疏」は、実は總理衙門大臣奕劻の「議覆謝祖源奏請練習洋務人才疏」の中の一部である。

- (12) 『清季外交史料』卷七十一
- (13) 『大清德宗景皇帝實錄』卷二百四十一
- (14) 曾紀澤『曾惠敏公手寫日記』光緒十三年閏四月二十一日
- (15) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』前編上
- (16) 傳雲龍「記中国自明代以来与西洋交涉大略」『申報』光緒十三年九月十二日
- (17) 李慈銘『越縕堂日記』光緒十三年閏四月二十四日。また、金梁『近世人物志』二六八頁
- (18) 「考取遊歷人員名單」『申報』光緒十三年九月十二日による。また佐々木揚「洋務運動期における清朝の外国事情調査——一八八七年遊歷官派遣」も参照されたい。
- (19) 黎庶昌『遊歷日本図経余紀』卷末題識
- (20) 翁同龢『翁文恭公日記』光緒十五年十一月十一日、光緒十九年十一月二十四日
- (21) 郭嵩燾『郭嵩燾日記』卷四、光緒十六年三月十三日
- (22) 『光緒政要』卷十六、光緒十六年六月
- (23) 程森『傳雲龍傳』『德清県新志』卷七、一九二三年修、一九三二年印刷
- (24) 王家儉『清季的海軍衙門』『中国近代海軍史論集』（台湾文史哲出版社、一九八四年）二一八頁
- (25) 程森『傳雲龍傳』『德清県新志』卷七
- (26) 「傳範初傳」『德清県新志』卷八

(27) 『德清県新志』卷八における李端臨・傳範初・傳範晃・傳範淑の紹介を見られたい。

- (28) 以下のいくつかの引用はすべて傳雲龍『遊歷日本図経余紀』
- (29) 王錫祺・王錫初編『小方壺齋輿地叢鈔』（上海著易堂、一八九一年）
- (30) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷三十、自序
- (31) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』
- (32) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷三十、自序
- (33) 黎庶昌『遊歷日本図経余紀』卷首序、卷末題識
- (34) 奕劻他「議覆謝祖源奏請練習洋務人才疏」
- (35) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』卷十五、自序
- (36) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』卷十五
- (37)・(38)・(39) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』卷三十、凡例・自序
- (40) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷二
- (41) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』卷十五
- (42) 黃遵憲『日本国志』凡例
- (43) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』卷十五
- (44)・(45)・(46) 傳雲龍『遊歷日本図経余紀』
- (47) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷十八
- (48) 顧厚焜『日本新政考』序
- (49) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷十九
- (50) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷二
- (51) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷十
- (52) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷十三
- (53) 傳雲龍『遊歷日本図経』卷十五

- (54) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十
- (55) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷十
- (56) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十
- (57) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十一
- (58) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十六
- (59) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十八
- (60) 盛邦和『黄遵憲史学思想研究』(江蘇古籍出版社、一九八七年)  
六〇—六一頁
- (61) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷二十八
- (62) 傳雲龍『遊歴日本図経』卷十
- (63) 詳しくは木村晟『『遊歴日本図経』の日本語集について』と大友信一『『遊歴日本図経』の「方言」所載の語彙』を参照されたい。
- (64) 黎庶昌『遊歴日本図経余紀』卷末題識